8/8～10　九州視察概要　松川町ゆうきの里を育てよう連絡協議会

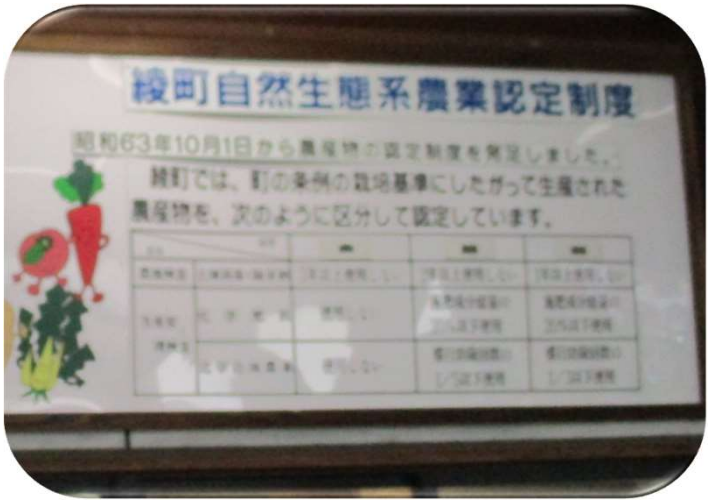
・・・視察行先・・・

宮崎県　　綾町：薬膳茶防オーガニックごうだ
　　綾町役場　有機農業振興係

大分県臼杵市：臼杵市役所　有機農業推進室
　　臼杵市土づくりセンター

長崎県佐世保市：菌ちゃんファーム

所属組織等	氏名
松川町長	宮下　智博
松川町議会議長	黒沢　哲郎
松川町議会総務産業建設副委員長	大蔵　洋
松川町農業委員会	北沢　ひろみ
松川町農業委員会	大場　健彦
ゆうき給食とどけ隊副会長	牛久保　二三男
学校栄養士　中央小	木下　めぐ美
学校調理員　中央小	村松　朋子
応募者	北沢　秀公
応募者	藤津　和寛
チャンネルYOU職員	柴田　紘希
アドバイザー　元長野県有機農業推進担当	吉田　太郎
アドバイザー　自然農法国際研究開発センター	岩石　真嗣
町産業観光課農業振興係　係長	宮島　公香
町産業観光課農業振興係　主任	小沢　香織
町産業観光課農業委員会事務局	宮澤　風香



8/8　宮崎県綾町

薬膳茶防オーガニックごうだ　郷田美紀子さんのお話し

拡大造林がはじまる時代に、微生物がいて、いのちが循環する照葉樹林伐採に反対

綾町はユニークなまちづくりをしてきた。私の父(郷田實)が町長になったとき、国をあげて(照葉樹林の)山を杉の山に変えようとしていた。このとき「これは誰のためにか」と父は疑問を呈した。もちろん、99.9%の町民が父に反対した。

夜逃げの町に背筋を通す倫理感ある理念を提唱

当時、綾町は夜逃げの町といわれていた。山を切らせないために、宇宙の成り立ちから土から山とか川のつながりを勉強していく。父はいろんな本を読みながら、「山やら川やらのこんな近くにいながらなんもしらなかった。山は誰も肥料をやらない。誰も耕さない。小鳥が糞尿をして実をつける」と言っていたことを思い出す。ひとつのまちづくりに哲学と理念があった。父が町長を辞めて35年も経つのだが、「綾にくるとピンと背筋が伸びるような理念を感じる。西日本の横綱である街だ」と評価された。

本物という哲学にこだわる

とにかく、誰も気づいていないときに、やっと化学肥料や農薬ができてきて農業が楽になると言われた時代に自然生態系農業を提言した。父は「本物」という言葉を大事にしていた。では、何が偽物で何が本物なのか。父は「人を騙さんもん。自分中心に生きないこと。地球の環境を汚さないもの」と言っていた。

地元の人たちも本物センターには誇りを持っているし。「変なものを本物センターに出したらいかんじゃないか」という。生産者と消費者とが顔が見えていれば、どこの国の産なのかを書かなくてもいいことになるのだが、そういう関係を私たちが描いて、身を守っていくことが大切である。私自身、(松川町の)関さんからりんごを送ってもらっている。きっと、いい果物を作るところだろうと思っている。そういうことが、人づてに伝わることがあるんじゃないか。

8/8　宮崎県綾町

綾町役場　農林振興課有機農業振興係の皆様のお話し

籾田学町長挨拶　有機農業を進める3つの条件がいる。
　まず、第一に強烈なリーダーシップを持っている人がいた。
50年前も前の郷田實という国の政策に逆行しても木を切ってもいかん、慣行農業で農業を改良して生産しようというときに安全・安心という強烈なリーダーシップをとっていた。1975年に自然を守る条例を作って国のJASの10年以上も前に条例を制定した。これが一番である。

　第二に、ひとつにまとまるためには大きくない方がいいと思う。綾町はいま6,800人ちょっと。当時は8,000人。皆顔を知っている。情報も入るし、ひとつにまとまる。単独のJAがひとつ。一つになれた条件があった。

3つ目が地形。綾は中山間地である。山があり、大地があり、平らなところはキュウリなので慣行農業だが高台に錦原という有機農業の中心地がある。さらに綾は上に大地がある。ここでは自然栽培をされている。自然の枯れ葉を使っている。自然栽培、有機農業、慣行農業という地形でやっている。松川町についてはグーグルで見せてもらったが盆地が。木曽山脈と南アルプスがあり、自分たちでコントロールできる町になるので、あとを継げるのではないか。我々もやらなければならないことがある。有機農業で儲かるところにいけないといけない。行政をあげて町をあげて取り組んでいるし、本物センターもやっているが、ふるさと納税もこれといった目玉がないが、野菜が問い合わせが多い。有機農業で作っているので、12回送るのだが、こちらに任せるとやっている。少しずつ評価されているのではないかと。日本全体で有機農業を盛り上げていきたいと思っている。

綾町の自然生態系農業～持続可能な美しい町を目指して

主な活動なのが、1973年に一坪菜園、1976年に青空市場、1988年に条例、1989年に本物センターが開設。
農業基本法が制定された時期とかぶっている。自然生態系を活かし育てる町にしようと。化学肥料、農業等の合成化学物質の利用を排除すること。遺伝子組み換え作物の栽培を行わないこととしている。
土の力を最大限に利用する。安全・安心できる農産物を生産。

消費者に信頼される綾町農業

具体的に土づくりでは土壌診断をしている。次に有機質の肥料を使って深く耕し土壌消毒はしない。畜産団地で堆肥を流通。家庭の生ゴミも自給肥料供給センターで生ゴミ堆肥を作る。そして、燃えるゴミは出さない。そして、家庭から出て来る屎尿も液肥にしている。

すべての農産物でJAS、有機農業推進法に基づく有機農業、最後が有機農業推進法に基づく有機農業をしている。認証まではしていない農家ものがある。そして、綾町の条例に基づくものである。

認証は栽培管理簿を作成する。センターで審査を行いランクを付けて本物センターに出荷する。

認証基準は2つある。認定外が基準がない場合。シールでランクを付ける。
町が有機JAS認証機関となっている。これは、大臣の認定を受けている。全国では認定機関になっているのが珍しい。
高齢化でやれない人の土地を受託して管理する農業法人を26年6月に設立、令和4年8月に解散予定。

郷田前町長の住民自治が内発的意識誘起を

なぜ、(生態系農業を)しなければいけないのかについて町民の意識が違う。また、移住する人には、ゴミを循環しなければならないということをご案内をしていることからスタートしている。住民説明会を介して理解をしている。まちづくりの座談会と有機農業の座談会があってその2つで意見を交わしている。前々町長(郷田)が自治公民館制度が住民自治であるとし、それから同時にやっている。「綾町こども憲章」でも教えているので、子どもの方が頭にあるかもしれない。

8/8　大分県臼杵市

臼杵市役所　農林振興課　有機農業推進室

ゆうきの里に向けた取り組み

臼杵市の人口は35,000人、高齢化率が40%を超えている。

本市は山が多く水源の涵養機能を維持する上で農業と林業とで循環社会の構築を目指している。ゆうきの里づくりに向けて色々としているが、議会も理解をして議会提案の条例や協議会の中できめ細かく推進している。

「ゆうきの里づくり」ということで有機農業、森林資源、水資源の3つで持続可能な循環型社会を目指している。平成14年に振興公社を設立。この頃から有機農業の推進を始めている。平成19年にほんまもんの里農業推進センターを設立。平成22年8月に堆肥センターが完成し、以来、自然に近い堆肥を作っている。

ほんまもん農産物を独自に認証

「美味しく生命力のある農産物を食卓に」ということで、平成22年に議員からの提案で条例でできている。これをもとに臼杵市ほんまもんの里の基本計画を策定している。基本計画では、安全・安心が臼杵市の有機農業である。そして、有機農業の振興、地産地消と都市交流と国際協力としている。

ほんまもんは、臼杵市の独自認証である。「大分有機農業研究会」に委託してJAS認証をしている。今年度は、資料の審査だけとなっている。もう制度ができて11年になっている。果樹農家は農薬を使わないので厳しいので何人か辞めている。ほんまもんは2haが21haとなり、90haが有機農業をやっている。農産物の取り扱いは市内で13ヶ所、市外28ヶ所。吉四六市場もあるのだが、Aコープがイオンと提携してイオン系列で吉四六市場で売っている。

臼杵では遊休農地問題はない

現在、認定している50人のほとんどが高齢者である。トップが92歳。有機農業でも後継者が必要なので、地域起こし協力の隊員を育ててカバーしようとしている。

堆肥センター見学

平成22年8月に堆肥センターが完成し、以来、自然に近い堆肥を作っている。N、P、Kの含有量は1％未満である。土壌改良剤的なものとなっている。原材料を1トン当たり300円で買っている6ヵ月という短い期間で堆肥を作っていることである。このため破砕機に入れて[石や豚糞に入っているトウモロコシの芯等]選別をして木の繊維を細かく磨り潰している。ここでほど堆肥に近いところまで持っている。そして、豚糞を混ぜるが、植物と豚糞が8：2で混ぜる。そして、完成したものは良い菌が均一化されている。これを一次発酵槽に戻している。1日に2～3mずつ堆肥を山で動かして、60日間かけて発酵促進している。隣に脱臭槽がある。もともとJAが豚舎を持っていた。そして、「臭いをなんとかしてくれ」というところで、臭いをダクトで吸い上げてスリットから上で臭いを閉じ込めているのだが、堆肥センターは開設してから臭いへの苦情は一度も起きていない。なお、二次発酵槽は通気はしていない。しなくても発酵することから、いま、改修工事をしている。ここで堆肥は70～80℃を超す。そして、2カ月で完成している。

堆肥の販売は市内農家には格安で

農家で堆肥を持ちに来てもらっている。5,000円／tで売っている。市外の人には売っていない。一方、袋入は10kgを300円で販売している。こちらは市外の方でも購入できる。堆肥を大量に入れたい人には農林振興公社に委託すれば運搬から散布、耕起もしている。

PRしていただいたためか、このところ視察が続出している。別府にアンテナショップを設けたりしている。消費者の需要を作ることが鍵であり、子どもが有機を評価してくれればいいと思っている。

この堆肥は窒素、リン、カリの成分はない。このため、農家が調整することとしている。ただし、ピーマンは根張りがよいのか木のようなふうに根が張っている。

8/10　長崎県佐世保市　菌ちゃんファーム

菌ちゃんファーム　吉田俊道氏

佐世保市の山の中。棚田の広がる場所からさらに奥へ進み、山の中の畑といった感じ。標高は340m。 若い従業員や研修生の方が何人もいて、お仕事されていました。離農されるかたの農地を購入＆山もついてきて、栽培しているとのことでした。

圃場をぐるっとまわり、緑肥にするとして、セスバニアが大きく育て、太陽熱マルチを行う。肥料が高騰しているため、草や竹、木を入れる農法を広げていきたい。
自然農で行う場合、草や木を入れて行うと、エサがなくなるまで栽培し続けないともったいない。
忙しくてそれができなかったが、従業員も増えてそれができる。
野菜は加工（パウダー）にして販売しており全国から注文があり、乾燥機の見学も。

以前、講演会でお話しいただいた、生ごみ発酵のたるもたくさんあり、いつも通り食べて、研修に参加いただいた皆さんも食べていました。

今回、栄養士さんが見えているようなのでと、学校での取り組みについてお話しいただきました。子供たちに煮干しを食べてもらうことで35度台だった子供たちの体温が36.5部まで上がり、免疫力が上がるという話でした。その体温も8月と3月は下がる。給食がないから。中央小の給食は出汁をとるのにも煮干しを使ったり、普段からしているので、もしかしたらそんなに変化が見られないかもしれないが、そういったことに取り組んでみてほしいとお話しいただきました。

有機農業ということではなく、この方法で作ったら、おいしいんです。土の中を発酵させればいい。そのポイントが今はわかったんです。苦労しなくていいんです。官民挙げて取り組んで欲しいと思いますとお話しいただきました。

～これから～

現在、参加いただいた皆さんにレポートの提出をお願いしています。

1.視察に参加して感じたこと
2.学んだことを活かし、この地域で取り組めること
3.具体的に私ができること
　こちらについてまとめていただいています。

今回、アドバイザーとして吉田太郎さんと自然農農法国際研究開発センターの岩石真嗣さんにご同行いただきました。
それぞれ参加いただいた皆さんの具体的に進めたい内容について、お2人にアドバイスいただきます。

チャンネルYOUの職員の方にも同行いただきました。8/19のニュースまつかわでは、今回の視察の様子が紹介されました。
1年を通じて行う活動について番組を作成していただく予定です。

活動報告についての要望もあり、日程・内容・方法については未定ですが、実施する予定でいます。

9月にはゆうきの里を育てよう連絡協議会と農業振興会議も開催を予定しています。その中で、今回の視察の内容を活かし、有機農業産地づくりに向けた5ヵ年計画の策定と、農業法人の立上げの検討を行います。